
主人公？ いえモブキャラAです。

眠れる英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公？ いえモブキャラAです。

【Nコード】

N4628X

【作者名】

眠れる英雄

【あらすじ】

気がついたらFateの世界にいた俺。……え、マジで？ 一般人、モブキャラAの俺がッ!? しかも拾われたのは衛宮 切嗣!? ヤバい、死亡フラグ満載じゃなえか!? ……え? しかも何これ直死の魔眼? 衛宮 志貴? ちょッ、マジで嫌な予感しかないんですけど!?

……え？　ここ何処ですか？

……どうしてこうなったんだろうか。

「よかった……本当によかった……！」

そう言っただけ涙を流しながら感謝を述べる男性。その人は、まるで大切な物を見つけたように笑みを浮かべながら泣いていた。

そう、この前小説で読んだ衛宮 切嗣のように……。

(ちよつと待て……！?)

おかしい、俺はこんな人知らない。なのに何でこんなに顔が近い!?

いや、そもそも体がピクリとも動かない。いくら力を込めても、指先一本すら動くことはなかった。

俺はうつすら見える眼を動かし辺りを見る。

そこは地獄だった。

人は死に絶え、建物は瓦礫へと崩壊し、炎が全てを燃やし尽くした。

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
死死死死死死死死

そこは、当たり前のように死があつた。

な、何だよこれ……………！

思わず目をそらしたくなる光景。俺はその光景見た途端

ズキンッ。

「ぐう……………！！」

次の瞬間、頭が割れそうな激痛が駆け巡る。まるで目が、頭が創り
変えられてるような感覚。

死に、身体が反応しているような　！

「う……………ガハアツ……………！！」

「……………！！」

突然、俺の横で誰かが咳き込んだ音がした。

いや、咳き込んだというよりも血を吐いたような……………？

「そんな……このままじゃ……！」

そばにいた男性の声が驚きに満ちてる。

何だ……？ 俺の横に誰かいるのか……？

俺は激痛の走る片方の目だけを開き、苦痛に顔を歪ませながらも確認する。

まず最初に見えたのは幼い少年の手。次に見えたのは小さく動く彼の胸。それは恐らく人が生きるための酸素を取り組めていないだろう。そして最後に見えたのは

どつかで見たことがある、赤毛の少年だった……。

………はい？

思わず痛みのこと何か忘れて彼のことを見つめる。

………

………

………

………ふう。いやいや、まさかな。そりゃないでしょ。

そんな顔を見てしまったからだろうか？ 彼を、救いたいと思っ
てしまったのは。

「あ、が……………」

痛みが全ての意識の中、俺は動かないはずの腕をゆっくり動かして
いく。感覚のない腕で、男性の腕を掴む。

それは掴んだとは言えなかったかもしれない。けど、それに男性は
気付き、俺の方を見る。

痛みが全てを支配するなかで言えたことはただ一つ。無意識で思っ
た、ただ一つの願い。

「彼を……………助……………け……………て……………」

それが本当の限界だった。俺はそれだけ言うと痛みに負けて意識を
失っていった。

『……………大丈夫。君たちは、絶対に死なせない……………！』

そんな、声が聞こえた気がした……………。

……えっと、初めまして？

はじめに見えたものは病院の天井だった。

「……知らない天井だ」

何となくどこぞの主人公のセリフを呟いてみる。……うん、若干恥ずかしいです。はい。

「……やあ、どうやら目を覚ましたようだね」

「ッ！？」

だ、誰だ！？ てか今の聞かれてた！？

急いで起き上がろうとして

ズキンッ！

「う……！」

右肩に鈍い痛みが走る。痛い、まるでそこから火が出ているように痛い。

「ほら、無理をしないほうがいい。傷は浅くても怪我してるんだから」

そう言われながら体を支えられ、ベットに腰をかける。

その時俺は初めて声をかけてきた人を見た。僕はボサボサになった黒いコート、疲れきった表情。

「……………あなたは……………？」

恐らく、俺の予想が正しければ

「うん？ 僕はね、衛宮 切嗣って言うんだ」

その人 衛宮 切嗣 は、確かにそう言った。

……………え？ ちょっと待って？ 今何とおっしゃいましたか？

……………

……………

……………

ま、マジで ツ！？

ちよ、ちよつと待て！？ 俺は何処にでもいるただの一般人だったんだぞ！？ え、何これ転生！？ いやでも俺まだ死んでないと思うし、てかまず何で Fate ツ！？ しかもこれって ……！！

「……………で、もう大丈夫なのかい志貴君？」

「 いや、そもそもこんなの夢に決まってるじゃないか。転生？ 何それ食えんの？ 更に ……え？ あ、うん、大丈夫……………」

…？」

あれ？ ちょっと待て。もう何度目かわからないがちょっと待て。今少しスルー仕掛けたけどこいつ何て俺を呼んだ？

『志貴』

……ちょっと落ち着こうかブルータス、現状をよく把握しろ。

俺はギギギギギと機械音みたいな音を出しながらゆっくりと鏡の方を向いた。
そこにいたのは

直死の殺人貴さんでした

幼い顔立ちでよくわからないが、何故か俺の体は遠野 志貴になっていた。

ま、マジですか……？ じ、じゃあさっきから見えてるこれは……！

そう、さっきから俺の視界には何やら黒い線が部屋の至るところに描かれていた。

間違いない。これは……！

『直死の魔眼』

あらゆる存在の死が見え、あらゆる存在を殺すことが出来る最悪の眼。

それが今、俺の目になっていた。

……最悪だ。

俺はそう心の中で呟くと、深くため息を吐いた。

「えっと……もう大丈夫かい？」

「……………うん」

あれから数分後、何とか立ち直った俺は切嗣と話していた。

……やっぱり視界に写る線が気味悪かったけど。

「えっと……唐突ですまないけど、知らないおじさんに引き取られるのと、孤児院に引き取られるの、どっちがいいかな？」

そう言つて切嗣は笑みを浮かべた。……そんなの、もちろん決まってる。

「……おじさんがいい」

いや、俺はおじさん好き何かじゃないぞ？ だって、確か孤児院の方は言峰によつて魔力を奪い取る装置の一部になつてしまつただから。

俺は、死にたくない！

俺の回答に切嗣は更に笑みを浮かべると、手を差しのばしてくれた。

「なら、一緒に行こうか」

「……………（コクッ）」

俺はその言葉に頷くと、ゆっくりとその手を握り締めた。

「ああ、そつだ……………大事なことを忘れてた」

すると、切嗣は俺を立たせながら忘れ物を言うような軽さでそれと言った。

「実はね……………僕は魔法使いなんだ」

……その笑みは、どこか清々しかった。

衛宮 切嗣 Side

「……………」

僕は黙ったまま、手を繋いでいる少年を見る。

その少年は一見普通そうに見えるけど、どこかおかしかった。

僕が名前を告げた途端、最初はそれに頷いたがまるでそれが自分の名前ではないように首を傾げた。

名前だけじゃない。他にも鏡を見ただけで自分に怯えていたし、今もこうして歩きながらも何かに恐怖している。

……無理もない。あんな地獄を見たのだから。

医者の方が言っていた。人は恐怖が限界を越えると今までの全てを忘れると。

恐らくこの少年は何も覚えていないだろう。自分が誰で、何をしてきたのか。

……あの時、自分がどれだけ勇気を持っていたのかも。

今でも忘れない。あの日、あの地獄の中で二人の少年を見つけた時、二人とも死にかけていた。

一方は酸素不足で呼吸が浅く、いつ窒息死するかわからない少年。

もう片方は少年のものとは思えないほどの叫びをあげながら、痛みを苦しむ少年。

それを僕は……彼らを救う方法は、結局一人でしか救えなかった。

だから迷った。全てを捨て、こんな地獄を産み出しておきながらも、僕は悩んでしまった。

もう、そんな資格僕にはなくせに

そうやって悩んでいると、ふと誰かに捕まれている感覚がした。驚いてそちらを見ると、絶叫をあげていた少年が苦しそうに、でも祈るように口を開いた。

『彼を……助……け……て……』

驚きだった。この少年が耐えている激痛は、恐らく生半端なものではないだろう。しかしそれでも彼は、自分よりもそばにいる誰かを助けてほしいと願ったのだ。

それは何て 眩しい光景だったのだろうか。

後で知ったことだが、彼らは兄弟でも知り合いでもなかった。彼は…… 赤の他人に自分よりも優先させたのだ。

そんな彼を…… 死なせていいはずがない。

『…… 大丈夫。君たちは、絶対に死なせない……!』

思えば、自然とそれが口から盛れていた。少年はその言葉を聞くと、安心したように意識を手放した。

「……………」

僕は意識を浮上させ、もう一度彼 志貴くんを見る。

そうだ。これは僕の罪だ。永遠に消えることのない、呪われた罪。

自然と、彼の手を握る掌に力がこもる。

彼を助ける。それが僕の…… 唯一の罪滅ぼし何だから

……とりあえず、その前に……

「……やあ、君が士郎くんかい？」

もう一人にも、挨拶しないとね……。

S i d e e n d

さあ、物語は始まった。ここから先はI Fの物語。

正義の味方と直死の殺人貴。

二つの願いは、いったい何処に向かっていくといつののだろうか

あれから……

どうも、どういわけか直死の殺人貴に転生したモブキャラAです。

あれから爺さん　衛宮　切嗣　に拾われてから数ヶ月が経過した。

最初は戸惑っていた土郎とも仲良くなり、時々やって来る大河（通称”藤ねえ”）ともいい喧嘩友達になったりと、のんびり日常をエンジョイしていた。

「はあ、平穩はすばらしいなー」

「まったく、志貴はオジサンくさいね」

そう言いながらズズツと持っていたお茶を、切嗣と一緒に飲みながら縁側で一息つく。

そうやって一時の平穩を満喫していると

「　爺さんッ！！　俺にも魔術を教えてくださいッ！！」

「」ぶぶぶ

「」！「」

後ろからいきなり士郎が現れ、俺と切嗣にスライリングタックルをぶちかまして来やがった。

思わず口に含んでいたお茶を吹き出しちまったじゃねえか!?

「ゴホツ、ゴホツ……し、士郎。またかい？」

ほら見る。切嗣だって同じように噎せてるだろ。

しかし士郎はそんなの関係ないとばかりに、

「頼むよ爺さん。俺は、俺も爺さんのような正義の味方になりたいんだッ!！」

……はあ。実はこの時から士郎って歪んでしまってたよねー。……ん？ 直そうとしなかったのかって？

いやいや、もう無理だって。だって将来の夢でみんなが医者とか警察官とか言っている中で、一人だけ『正義の味方』とか言ってるんだぜ？ もう取り返しつかないよ。

ちなみに俺は『フリーター』って書いて先生からかなり微妙な顔をされたが……。

「士郎………志貴、君はどう思う？」

「え？ 俺？」

そうやって懐かしがっていると、唐突に切嗣は俺に聞いてきた。

……切嗣、そんな重要な話を俺に決めさせんな。あと士郎、そんなキラキラした目で俺を見てくるんじゃないやありません！

俺は少し悩む素振りを見せると、口を開いた。

「爺さん……頼む、士郎に魔術を教えてやってくれ」

そう、俺はずっとあれを考えていた。

第五次聖杯戦争。

衛宮 士郎が主人公であるFateの物語。正義の味方になるためには避けて通れない道だろう。

いや、そもそもそんなことどうでもいい。問題はただ一つ。

……俺、このままここにいたら巻き込まれんじゃね？

どのFateルートでも必ず衛宮家を中心となって行動していた。そんななか、魔術を知らない士郎がランサーに狙われたりしたら……。

士郎は殺され、家族ということであれまで標的になっちまう！？

いくら俺が直死の魔眼を持っていたにしても、あの速さにはついていけない気がしない。……少し体鍛えようかな？

まあそんなわけで、少しでも死亡フラグを避けるために出来るなら魔術を教わりたいたいというのが、俺の本心だ。

……それに、あんまり死を見続けたくないしな。

「……そうか、わかった。士郎、志貴、僕についてきて」

切嗣は何やら決心すると立ち上がり、向こうの土蔵へと歩きだした。

「よっしゃッ！！ わかったよ爺さんッ！！」

士郎はついに魔術を教えて貰えるのかと、嬉しそうに笑顔のまま切嗣すら追い越して土蔵に走り出した。

「さてと、じゃあ俺は」

「志貴、君に渡したいものがあるんだ」

「……………?」

何だ？ てか早く土蔵に行かなくていいのか？

俺が心配する中、切嗣は懐からあるものを取り出した。

それは、眼鏡だった。

「ッー!!」

ドクンッ！ と体の動きが止まる。その眼鏡から視線を離せなくな

る。

間違いない。これは

「そつだよ。これは”魔眼殺し”の眼鏡だ」

「…………どうしてこれを俺に…………？」

震える声で、切嗣を見上げる。そんな、バレていた？

「…………正直言って、僕は志貴が見ている世界は見えない。だけど、志貴が何かを見て怯えていることはわかるよ」

けどね、っと切嗣は優しい笑みを浮かべると、俺の頭に手を乗せ、

「それは君の力だ志貴。その力はいずれ必要な時がきつと来る。だから、絶望してはいけないよ」

思わず泣きそうになった。きつと俺は、心の何処かで無理をしていたのかもしれない。

…………どっかの吸血鬼さんだっけって言うていたじゃないか。死を見続けていたら、狂ってしまうって。ああ、きつとそうなんだろう。俺はきつと狂ってる。

俺は、この目が怖い。一歩間違えれば切嗣を、士郎を殺してしまうこの目が怖い。

けど、俺は進まない。前へ、一歩でも前へ。

俺はそつと眼鏡を受けとる。そして、それを着けた瞬間

世界は、輝きを取り戻した。

「……………」

声が、出ない。瞬きすることすらできない。

感情は一つに埋め尽くされていた。その感情は”喜び”。この世界に、線がない、真っ白な世界に戻ってこれた喜び。

気づけば、俺はただただ目の前の光景を見続けた。目から涙を流していることにも気づかず……………。

それは　初めて、死が存在しない世界だった

「……………よく、今まで耐えた。志貴」

切嗣はそつと俺を抱き締めた。その暖かさは、何よりも暖かったんだ……………。

俺はしばらく、その光景に目を奪われていた

「……………爺さんまだかな　？」

土蔵で、そんなことを呟く少年がいたことを忘れていた……………。

え？ 特訓ツスカ？（前書き）

何故か感想のほとんどが駄目だし……心が折れそうです。

しかし！ 俺は絶対諦めない！ テメーらの方こそ……ついて来や
がれた ツ！！

嘘です、どうかついて来てください。お願いします。

では、本編をどーぞ

え？ 特訓ツスカ？

切嗣から眼鏡をもらったあの日から、早二年の月日が流れた。

士郎はというと、切嗣から教えてもらった魔術の日々特訓、そして

「うおおおおおおおおおおおッ！..!」

「甘いわよ..!」

パシーンッ!..!

「あ痛ッ!..?」

藤ねえと稽古の特訓をしていた。

.....とりあえずさ、一言だけ言っただけいいか？

「.....なんで防具着けないんだ？」

そう、どういいうわけか二人は防具を一切着けず袴だけで試合をしていた。

いや、そもそも試合でもないだろう。竹刀と竹刀で打ち合い、相手
の隙を突く繰り返し。当たればそこには尋常じゃないほど痛いはず

だ。

もはやこれは、剣道ではなく剣術と言ったほうが正しいだろう。

……実際は、士郎が一回も手を出せず、藤ねえのワンサイドゲームだったか。

……ん？ 俺は何をしているかだって？ それはもちろん

「ズズウ……はあ、平和だなあ………」

道場でのんびりお茶を飲んでますが何か？

……

……

……

うん、わかった。ちゃんと理由を説明するからその沈黙は止めて。こう胸にグサツと来る。

まあ理由なんかただ一つ。超シンプルイズベスト。

この体、メチャクチャ貧血激しいんです。はい。

原作で遠野 志貴がよく貧血を起こしていたように、俺の方も運動しただけで簡単にぶっ倒れやがる。

いやー、この前の士郎との初めての稽古ではマジ焦ったわー。開始10でぶっ倒れるとかどんだけだよ。俺、原作始まったら真っ先に死ぬんじゃない？

まあそのせいで、士郎と藤ねえから病人扱いされるようになってしまったんだが……。

違うぞ士郎！俺は体が弱いんじゃない。ただ倒れやすいだけなんだ！ 実際俺の方が士郎より早く動けるからなッ！！

「くそう！ 藤ねえ、もう一本だ！！」

「ハッハッハッ！！ 私に勝とうなど一万光年早いわよッ！！」

「ズズウ……はあ、お茶がうまいな……」

いやー、今日も平和だなー。

どんどん熱くなっていく二人を眺めながら、お茶を啜っていると

「おや？ 今日もせいが出てるね二人とも」

「ッ！ 爺さんもう帰って来たのかッ!？」

「切嗣さんおはようございますッ!！」

「ズズウ……………はあ、お茶がうまいな……………」

ふと、スーツ姿の切嗣が道場の出入口に現れた。

……………え？ もう少し反応しろって？ いやいや、士郎の入れたお茶の旨さなめんなよ？ 俺この一杯で隕石が降ってきてても落ち着ける気がするよ。

「……………ふうっ」

さてと、そろそろいいかな。

俺はお茶全てを飲みきり、スツと立ち上がると、三人仲良く談話している切嗣たちに近づいた。

「爺さんッ!! 俺こっを見せてだいぶ強くなっただんだけ！ 後で稽古つけてくれよ!!！」

「そう言いながら私に一本も取れてないけどねー」

「なッ!？ う、うるさいタイガーッ!！」

「タイガーって言うな ッ!！」

「ハハハハハ……ん？」

何時ものようなコントをする二人を暖かい目で見守っていた切嗣は、どうやら俺が近づいてきたことに気づいたように顔を上げた。

一瞬視線が重なり、切嗣の頬……いや、お互いの頬が緩むのを感じた。

俺はヨツと右腕を上げ、

「お帰り、爺さん。久しぶりだな。二ヶ月ぶりじゃないか？」

「ああ、久しぶりだね。どうだい二人とも。少しは成長したかい？」

げ、切嗣……。アンタ、何てことを言うんだよ……。

「おう！ 両方とも毎日ちゃんと鍛えてるぜ！」

ほら見る。どっかの正義バカのテンションに日をつけちまったじゃねえか。

「はあ、やれやれ……。ま、俺もほどほどかな」

切嗣の質問に、士郎は首が千切れそうな速さで頷き、俺はため息を吐きながら答えた。

それを聞いた切嗣はうんうんっと頷いて、

「志貴、久しぶりに稽古しないかい？」

爆弾発言しやがった。

……はい？ 今コイツ、何ツツタ？

「ええっ！ 何で志貴が先なんだよ。俺にも稽古つけてくれよ」

「そうですよ切嗣さん！ 私だって切嗣と一緒に」

「あ、そういえば大河ちゃん。居間にお土産置いてきたから士郎と一緒に休憩してきたらどうだい？」

「士郎！ ちょっとお姉ちゃん疲れたからお茶淹れて！！」

「ちょ、藤ねえストップ！ くそ、志貴！ お前だけズルいぞッ！！」

ドタバタガタガタッ

そんな効果音がつきそうな二人が居間へ走り出すのを、俺は呆然と見てるしかなかった。

二人が道場から去って、辺りが静けさを取り戻してから冷静に対応する。

……落ち着け俺。冷静に判断しろ。さっき切嗣は何て言った？

『志貴、久しぶりに稽古しないかい？』

……………100%面倒事でした、はい。

冗談じゃない。付き合ってられるかと断ろうとして

「さあ、来なさい志貴」

「あれいつの間につ！？」

気付いたらお互い向き合って構えていた。

あ…ありのまま、今起こった事を話すぜ！ 『俺は断ろうとしたら気付いたら構えていた』な…何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった…頭がどうかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…………。

「志貴には魔術の才能がまったくなかったからね。だから僕が教えられるのはこれくらいさ」

「それを何で今言っつ！？」

思わずツツコンでしまう。…………うう、嫌い、魔術がなんだーツツ！！
魔術なんか使えなくなつて人は生きていけるんだよ！！

そう。俺、衛宮 志貴は魔術の才能が皆無だった。

士郎でも少しは才能があったと言うのに、俺には魔術を使う事…………

いや、魔術を発動する事が永遠に不可能らしい。

……駄目じゃん、俺。

「……ああくそ！ こうなったら八つ当たりだ！ 爺さん、本気でいくぞ！」

「うん、そうでないと挑発した意味がないからね」

俺は腰を低く構え、右手に持っている木刀 ナイフぐらいの大きさ を握り締め、何時でも飛び出せるように下げた左足に力を込める。

一方、切嗣はあくまで自然体。何も持たず、素手のままでこちらを見ってくる。

その姿には、隙がなかった。

(これが……衛宮 切嗣。これが 魔術師殺し)

ゴクツ、と唾を飲み込む。汗で手が滲む。緊張で心臓の音が煩い。

凄い、そう心から思う。幾たびの戦場でつちかってきた経験。それが、この男の強さになっている。

例えこれが 万全の状態じゃないとしても。

「……いくぞ」

俺はそう呟き……切嗣に向かって駆け出した。

……さて、先程から不思議に思っている人たちがいるだろう。

『俺と切嗣はいつたい何をしてるだ？』と。

その答えは実に簡単。俺が切嗣に教わっているのは、ナイフの扱い方と対術だ。

士郎は切嗣から剣術と魔術を教わり、魔術の才能がない俺は切嗣に頼んでその二つを教わっている。

せめて、魔術が使えないなら原作の遠野 志貴ぐらいにまでなっておかいとな……。

まあ、そんな感じで以上だ。説明終わり。

「ふっ！」

まず始めに、下から上へ斬り上げるようにナイフを振るう。

しかしその一撃を軽々かわし、切嗣は振り切った俺の腕を掴み、

「ふんッ！」

「チィッ！」

見事な背負い投げで投げ飛ばそうとしてきやがった！

俺はすぐさま掴んでる切嗣の腕を蹴り飛ばし、力が緩んだ瞬間バツクステップで距離を取る。

「と見せかけてえッ！！」

「なッ！？」

切嗣も俺が距離を取るのだと思ったのだろう。しかし俺は後ろに下がった瞬間、軸足を曲げ一瞬の内に距離を縮める。

突然のことに反応できない切嗣に向かって、今度は胸元にナイフを突き出す。

決まった。そう確信した次の瞬間、

「甘いよ」

「なッ！？」

今度は俺が驚愕する番だった。切嗣は一瞬で判断するとナイフの腹

の部分を手の甲で受け流すと、俺が横を過ぎるのを利用し、首に向かって手刀を繰り出した。

「ガハツ!？」

当然、すでに行動に移ってる状態で避けれるはずがなく、何とか首を曲げることで直撃は避けたが強烈な一撃を頭にくらい、地面に叩きつけられた。

その拍子にかけていた眼鏡が飛ぶ。

「イタタタ……今回は俺の負けだな」

「大丈夫か志貴？」

「そう思うなら頼むから手加減してくれよ……」

俺は悪態を吐きながら、切嗣が持ってきた眼鏡を受け取ろうと手を伸ばして

「……………ッ!!」

……………見て、しまった。

直死の魔眼が、死が、見えてしまう。

「……………志貴？」

切嗣が固まってしまった俺を不思議そうに見つめる。だが、今の俺にはその表情が見えない。

黒い線が、死が、切嗣の身体中を蝕んでいる。隙間なく、ぎっしりと。

「……………うん、大丈夫だよ」

俺は震えないように、必死に笑顔を作って眼鏡を受けとる。そして、眼鏡をかけた。

世界から、死が遠ざかっていく。世界から、生が戻ってくる。

切嗣は眼鏡をかけた状態でもやはり心配そうな顔をしていた。

……………自分の体があんな風になっているのにも関わらず。

「……………悪い爺さん。少し動いたせいかな、若干貧血気味だから一人でゆっくりさせてくれないか？　すぐ良くなると思うからさ」

嘘だ。確かに動いたけどあんだけじゃまだ貧血が起こるはずがない。なのに切嗣は笑って、

「そっか、悪かったね志貴。少し休みなよ」

……………違う、アンタが謝る必要なんてないんだ。悪いのは俺なんだ。

そんな言葉が喉まで溢れてくる。なのにあと一歩、どうしても口か

ら出てこなかった。そう倒れていると、切嗣はどんどん離れていき

……やがて、道場には俺一人になってしまった。

「……………」

静寂が、部屋を包み込む。恐ろしいほど部屋から音がしない。

「…………俺は、弱いな」

ふと、口からそんな言葉が溢れた。

視えてしまった。切嗣の死を。全身に蝕まれた死。あれは恐らく……アンリ・マユの呪いなんだろう。

それを見た瞬間　理解してしまった。あれは、殺せない。もうあれは、衛宮　切嗣と完全に融合してしまっている。

あれは衛宮　切嗣であり、アンリ・マユなんだ。

それを理解してしまった瞬間……俺は、諦めるしか出来なかった。

「俺は……弱いな……」

主人公なら諦めないだろう。きっと、遠野　志貴なら諦めなかったはずだ。けど……俺は、モブキャラだから、諦めてしまった。

「俺は……弱え………！」

……そう、もう一度弱々しく呟くしかなかった……。

もしも、何て救いはない。あるのは救えないという現実のみ。

そして 別れの時が、近付いてきた

アンケート（前書き）

ちよいつと簡単なアンケートです。ご協力お願いします。

アンケート

こんにちは、作者の『眠れる英雄』です。

今回ですが、アンケートを取ることになりました。

最近、皆様から感想と共にかなりの否定文が多いので、皆様の意見を聞いてみたくまりました。

選択肢の方ですが

1・主人公を遠野 志貴から完全オリ主に変更する。 能力も変更
されます。

2・死んで神様に出会い、チート+直死の魔眼(安全)ゲットで原作ブレイクッ!!

3・矛盾点は多いが、そのままでもいい。これからの期待!!(期待しないでくれ)

4・こんな話はいいから、とりあえずアニメ放送中の第四次聖杯戦
争でも書けッ！！

5・むしろ書くな。貴様の作品など見たくない。

以上の、五つの中から選んでください。

締め切りは来週の月曜日まで。皆さんどうかアンケートにご協力し
てください！ お願いしますッ！！

……俺、もしも5番が多かったら止めるかもな……ショックで。

どうか……どうか！ アンケートに協力してくださいいいいいいい
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4628x/>

主人公？ いえモブキャラAです。

2011年10月19日07時07分発行